

トランスジェンダー研究再考
—当事者へのヘルス・ケアという側面に注目して—

大阪大学大学院人文学研究科博士前期課程 2 年
二宮晃紀

本研究はトランスジェンダー研究（以下 TG 研究）の困難を指摘し、トランス医療をヘルス・ケアの問題として捉え直すものである。周知の通り TG 研究は社会学を中心として、性同一性障害研究（以下 GID 研究）を批判的に継承する形で誕生した。とりわけ性同一性障害概念が①性別二元論を強化しておりノンバイナリーな当事者を包含し得ない点、②精神障害として性別違和を扱う病理学的な枠組み、③性同一性障害者と性別変更要件に関わる特例法（通称特例法）の 3 点への批判を主軸として行われていた。

しかしいずれの批判の仕方も十分とはいえない。①については、例えば虎井まさ衛のようになんとしても性別を変化させたい人々や、③についてはそれまでは司法では議論すらされることのなかった性同一性障害について特例法の成立へとこじつけた当事者の存在などを高く評価する研究は見当たらない。本研究では、とりわけ②に焦点を当て TG 研究における DSM や手術などを担う医療への注目の不十分さを指摘したい。言うまでもなく多くの当事者が自らの苦痛を取り除き QOL を向上させるために医療と関わっている。それは時に吉野暉が批判するような GID 規範を産みかねないが、一方で当事者が現行の制度の中でサバイブしてゆく方法とも取れよう。このように臨床の現場では一つの治療法を受け入れるか否かといった単純な図式で語れない当事者の姿がある。そのため本研究では改めて医療と当事者の関係について考察したい。

トランスジェンダー研究における医療を考えるために本研究では以下の手順をとる。まずトランス医療（勃興当初はトランスセクシュアル医療）の歴史を概観する。具体的にはセクソロジーの誕生から外科的手術、DSM などの医療と当事者の関わりから性別違和における病理化の流れと、それへの当事者の運動を整理する。次に日本におけるトランス医療の受容と反発について示す。続いて今日のトランス医療と当事者の関わりを考察し、TG 研究が医療への関心を十分に持てなかったことを示す。これらを踏まえて当事者が医療に適切にアクセスできる場について提案を行う。

本研究は当事者の苦痛を取り除き快適に生きることの意味を検討するものである。性的マイノリティへの議論が盛んになっている今日において、当事者の生き方について考察する本研究は極めて重要な意義を持つものであると考えられる。